（第９回日本土木史研究発表会論文集　1989年６月）

野蒜築港と安積疏水の歴史的変遷
－東北開発の先駆けとなった明治プロジェクト－

東北大学　正会員　須田　熙
東北大学○正会員　小林眞勝

Historical Prosess of the Nobiru Port Construction
and the Drainage of Asaka canal

by Hiroshi Suda
Masakatu Kobayashi

概　　要

明治政府は全国統治と富国強兵の一環として東北開発の方針を採りあげ、その結果、東北地方において７大プロジェクトが計画された。その内宮城県の野蒜築港、福島県の安積疏水、山形県の道路建設が先行された。これらのプロジェクトは、東北地方の河川を利用した内陸水運網をつくり、その結接点に国際貿易港として野蒜港を位置づける壮大なものであった。野蒜築港と安積疏水の二大プロジェクトは東北開発の先駆けとしてその重要性が認識されていたが、野蒜築港は大自然の猛威の前に僅か2～3年の短命で水泡と化し、幻の港となったのである。その後、野蒜村も再起することなく寒村に戻った。安積疏水は荒蕪だった原野に通水され郡山村を核にして点在していた開拓村の発展に寄与し、この疏水なくしては現在の郡山地域の発展を語れないものになった。しかし、この野蒜築港と安積疏水は時代的にも又、ファン・ドールンといった登場人物も共通しているが、そのプロジェクトに対する地域住民の考え方には異なるものが見られる。このような大プロジェクトの成否は土木技術だけでなく、住民のプロジェクトに対する熱意も必要であることが、この２つのプロジェクトの明暗を分けたといっても過言ではないと思われる。　（幕末から明治中期、地域、人物）

１．はじめに

戊辰戦争から西南戦争へと国内は騒乱していた明治初年、新政府は早く新体制機構に馴染む様に努力していた。国内においては廃藩置県後の失業士族約194万人に対する士族授産事業は急を要したし、国外においては徐々にロシアの南下があり不気味な存在でそれに伴う北辺の警護も重要だった。この問題を解決しようと計画されたのが以下に示す東北地方における７大プロジェクトである。（図－１参照）

(1)野蒜港の建設。
(2)宮城、山形両県を結ぶ新道の建設。
(3)岩手県、秋田両県を結ぶ新道の建設。
(4)安積疏水の建設。
(5)阿仁鉱山の開発。
(6)院内鉱山の開発。
(7)油戸炭山（山形県）の開発。

特にこれらのプロジェクトの中で野蒜港と安積疏水の建設は東北地方東海岸の二大河川である北上川と阿武隈川を運河で結び、野蒜を起点として外洋と結ぶならば、東北地方の物産は容易にこの地に集散し、広大な仙台平野を後背地として野蒜は国際貿易港としても大いに発展が期待される。また猪苗代湖の水を東注し荒蕪した安積原野を開墾し、その水を阿武隈川に落し水量を増して水運を活発化して野蒜港と直結しこれと東北地方にある大河川と中小河川を利用した内陸水運網をつくろうとする壮大な計画であった。しかし、野蒜築港は築港開始から僅か７年後に完成を見ないまま、その計画を断念することになる。一方安積疏水は現在もその機能を保持し、また郡山発展の基礎ともなった。本論文は、これらのプロジェクトの計画から 120年を経過した今日、野蒜築港と安積疏水を比較しながら、その計画における国や地方の考え方、及び地元住民のプロジェクトに対する熱意を通し、プロジェクトの成功不成功

の鍵が何であるかを探ろうとするものである。

2．東北巡幸と大久保利通卿

明治9年6月2日、明治天皇（25歳）が戊辰戦争後の東北地方の状況視察と産業奨励の目的で御巡幸された。もう一つの目的は東北開発の可能性を探し出す事でもあった。その推進者に内務卿・大久保利通で 5月23日に天皇巡幸一行より一足早く旅たった。このことが東北プロジェクトの決定的要因となった。天皇一行は東北各地を巡幸されたが福島県の郡山にて大きな開拓を行い成功していると聞き福島県に入られ同16日に開成館にお泊になり、そして誕生間もない「桑野村」の様子をご覧になった。続いて同月22日に宮城県に足を進め戊辰戦争後の町の様子をご覧になった。同月27日に松島に向かわれ松島湾内を遊覧された。その後吉岡、古川、築館を経て岩手県に御入りになった。

大久保卿は一足早く桑野村を見て5月31日に福島県典事・中条政恒と会見して中条氏から安積原野が開拓地として優れていることと潅漑用水をこの時猪苗代湖から引き、桑野村を拡大した大規模開墾が可能であり、よい手本がこの桑野村である説明を受けた。引続き6月20日に宮城県入りして野蒜海岸と鳴瀬川口の形状等を土木局長・石井省一郎他を随行して不老山から戸長・尾形正三郎氏から説明を受け視察され、北上川河口等にも足をのばした。

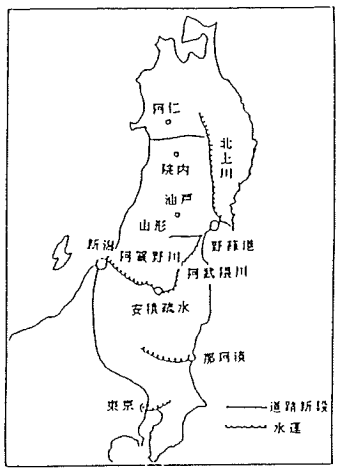
大久保卿は帰京すると早速に、東北開発の7大プロジェクトを作成し調査に当たらせた。

3．宮城・福島両県の開発以前の体制

（1）宮城県の体制

宮城県での中心地は仙台で今も昔も変わりない。宮城県は仙台藩・伊達家が岩出山に開府して明治維新までの227年間全域を領していた。仙台藩は幕藩体制から近代体制への移行期には近代に向けて先頭に立って発言していた、蘭学ももっとも早く実を結んでいたし、工藤球卿・林子平の先駆者が北警論を警告していた。この思想は藩をこえた人達として貢献度は大きい。

明治政府は親機構体制を強いていた。その対応に仙台藩が東北地方の調整役となった。しかし、母体の仙台藩の態度は今一つはっきりしないものがあった。藩の勢力は最初の内は尊王攘夷派が大勢だったのだがそのうち保守的佐幕的となった。維新も治まり新時代を迎える矢先に尊攘派から内部告発（でっち上げ）の上訴があり戊辰戦争の責任者として有能な人材が裁かれたのである。その犠牲者に国老の但木土佐と坂英力、奉行－和田織部、養賢堂指南－玉虫左太夫、奉行－遠藤主悦、郡奉行－若生文十郎、近習目付－安田竹之助、近習目付－栗林五郎七郎、監察－斉藤安右エ門、若老－武田杢助等がいた。中でも代々土木事業（御船入り堀）を司り職務してきた和田織部（38歳）、それに万延元年に勝海舟と共にアメリカに渡った玉虫左太夫（47歳）等は新時代の指導者でもあった。この処分は政府からの強圧ではなかったが、これを口実に仙台藩が立ち直る政治力を断ち切る役割をも果たしたのでないかと思う。



図－1　7大東北地方プロジェクト図
（1977.2　宮城県政だより　引用）

仙台藩には先の処分に引続き支藩の北海道移住でわたった仙台藩士は、合計1,362戸、人員約 8,000人にものぼった。[1] この様に野蒜築港が計画された頃は仙台藩には主な者が希少の状態でようやく郷土建設に立ち上がりかけている頃であり。安積開拓には、士族が全国から集まったのとでは大きな違いである。

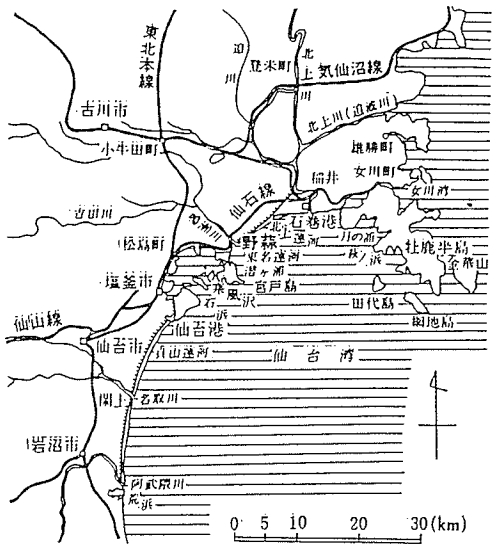
（2）福島県の体制

福島県は会津地方、中通り地方、浜道り地方となっていた。郡山は中通り地方に属し、二本松藩・丹羽光重氏の領下で宿場町として賑わいを呈した。人

口も慶長年間(1596-1614)のころの戸数6人口約40人から比べると文政年間(1818-29)に戸数700戸、人口3,900人を数えて藩内有数の大村となった。この繁栄は奥州街道の宿場町として位置ずけられていたからである。戊辰戦争で落城するまで約220余年間、安積地方（安積郡・安達郡・信夫郡の一部）は丹羽氏によって治められた。

宿場町の発展により享保年間（1716-35)頃より商人が頭角を現わし村の実力者に成長してきて、村の1/3の人達が富裕者（商人）が形成され。郡山は街道筋の宿場町であったことから商業的利益が多く、農業への関心は薄かった。

二本松藩の新田開発は規模が大きいものではなかった。地理的にも郡山村が標高250m前後の台地にあり阿武隈川までの河川床は急勾配で狭い平野があるだけで必然的に二本松の南方にある本宮宿を中心とした河川段丘を利用して新田開発してきた。[2)]

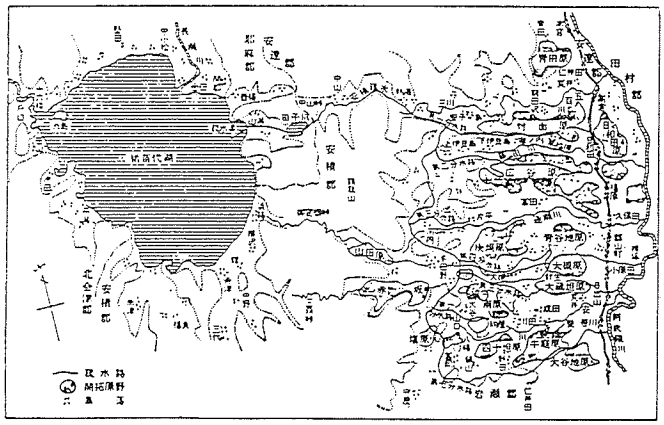


図－2　野蒜周辺図
(1987.8 土木学会誌　引用)

5．両県の開発構想の動機となった事業

（1）野蒜村の場合

仙台藩の所領は62万石でその範囲は、南北 196km・東西63kmにおよぶ広大な生産力の高い肥沃な土地を持っていた。この仙台米を江戸に廻米して藩の主要な財としており、これらの廻米は海路で運んだ。藩政初期には、気仙、遠鳴で中期には荒浜、野蒜、塩釜、磯崎、石巻の五港が指定され。その中心となったのが石巻港であった。野蒜は四日市場、三本木、下中ノ目、松山等の米蔵に集めた米を鳴瀬川によって野蒜のお蔵五棟に収納した。[3)]



図－3　安積疏水網と開墾地図
(1983 福島県の歴史　引用)

野蒜村の人口は安永年間(1772-1780)には84戸、654人と鳴瀬町誌に記録されている。明治5 年に全国戸籍調査が行われ仙台の人口は5 万人、戸数は1万1千戸、内訳約7 千戸は士族平民は4 千戸であった。[4)]　(図－2 参照)

その後、物流拠点は松島湾に移り湾内でも大きい桂島の石浜港、浦戸の寒風沢港などが積出港の碇泊港として亘理荒浜の補助港となり牡鹿半島の小淵と共に千石船の碇泊地として活躍した。この様に野蒜村に隣接した港は物流の集散地として活気を呈していたが野蒜村はこれとてここに港を造ろうという歴史事実も見あたらない寒村であった。

（2）郡山村の場合

明治3 年頃にこの広大な諸原野に猪苗代湖の水を東注して潅漑しようと夢物語を真剣に考え行動していた人達がいた。大槻村の相楽半右衛門、駒屋村の山岡友次郎、小原田村の関口桃翁、多田野村の山岡山三郎、須賀川駅の小林久敬等らが、それぞれ現地踏査を行って各方面に働きかけて、必要性を説いていた。この構想が郡山宿場町を核とした安積原野開拓の下地となるのであるが、その時は笑罵されるだ

けであった。

明治5 年の郡山村の戸数817戸、人口4,412人であった。宿場町の人口増加は目ざましいものであったが、宿場町の生活は一部の豪商と多くの貧民とに分けられ貧富の差が甚だしかった。戸数1,062のうち上等50戸、中等150戸、下等は862戸と言う有様だった。[5)]

県事業として県令、官吏、豪農商人の手で県営大視原開墾（開成山ー桑野村）を実施した、これは桑園造成を主としたものである。開墾規模面積は約 440haで入植187戸に既存存農家16戸を加えた203戸を当初計画であった。しかし、水利の便は甚だ悪いため貯水池（開成沼）の工事から開始し、明治 6年 4月に開墾結社（開成社）を結成して翌年には事業もおおむね成功の域に達し、戸数も増え、色々な施設も整備されたので、一村を設置することが適当であるとし、明治8 年新村設置の申請を内務省に提出した。明治9年4月に許可があり、新村名は「桑野村」と公布された。桑を野に満たしむの意からでたものである。当時の人口は開成社の小作人・一般移住開墾者100余戸、それに二本松士族住を含め合計700人であった。[6)]　（図－３参照）

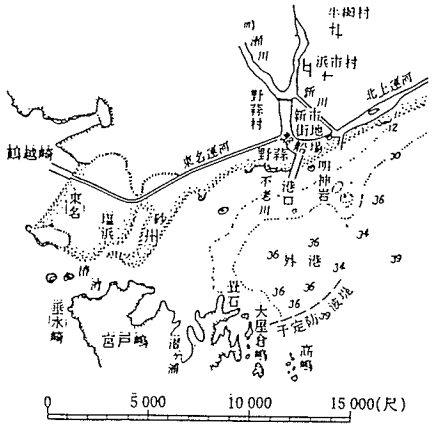
6．宮城・福島両県令の開発構想の捉え方

（1）宮城県令

野蒜築港に対し松平正直（M11.8/25 - M24）はまっ向から反対した。その理由は一つに港口が風浪の激しい時は外港と内港の連絡が断たれる危険があること。二つに築港の位置そのものが松島湾からの往来船舶には著しく不便である。ならば何処が適地か計画の位置より東の稽湾方面（宮戸島）にと主張した。しかし、ファン・ドールンは稽方面は遠浅で港口の突堤が長くなること、また漂砂の堆積量が多いと主張して自説をゆずらなかった（図－４参照）。

松平氏は宮城県の過渡期に14年間の長き奉職し、その間に製糸業の普及、奥羽水陸運輸会社の設立、宮城私立教育会の設立と福島県の三島県令とは対象的に協調政治を推進した。後に貴族院になった。

官吏では早川智寛(M11 -M12.11・M13.10.24 - M19)で松平県令から招かれ赴任した。野蒜築港建設には側面から支えた功労者である。その後、仙台商業会議所の設立に貢献し初代会頭になり、仙台市三代



図－４　野蒜内港、外港計画図
（1987.8 土木学会誌　引用）

市長(M36.4.2-M40.7.1)の経歴の持ち主である。

増田繁幸(M12.3.20-M23.6.30) 初代県会議長でありプロジェクトに合わせ付帯工事を提案した。後に、一関県令、磐井県権県令と歴任し衆議院議員となる。

遠藤温氏は増田氏と共に戊辰戦争の際には勤王派に属し、戦後は協力して善後処理にあたり宮城県参事となった。菅克復(M11-M16) 松平県令の手助けとして宮城郡長を遂行。その後、近代的工場の経営者になり明治21年に仙台に初めて電灯を灯した。[7)]

細谷十太夫も野蒜築港と関わりを持った。細谷は幕末に石巻を戦火から救った人で、その後、政府から北海道沙流郡地方の開拓指導を命ぜられ赴任、同地で開拓使庁権少典に昇任して、明治11年 5月宮城県五等属に任官し野蒜築港及び北上運河建設工事監督になる。同氏はその後、石巻の大街道開拓にその手腕を発揮し晩年は住職として終えた。

（2）福島県令

安場保和（M 5 - M 8.12）は安積疏水前の県事業の大規原（桑野村）開拓からで積極的に行動して完成する。この後任に山吉盛典(M 8- M15)に先の開拓の成功を見て新政府の士族授産の適地と選定を受け規模の大きい開拓と安積疏水に引き継いだ。

次に三島通庸(M15.2.17-M17)が引継、道路網の開拓、思想運動の弾圧にと手腕を奮った。官吏では、中条政恒(M 5.9-M15) 県典事で安場県令と共に大視原開拓に活躍した。中条氏は若くして北方経営に興味を持ち、その情熱を時の安場県令に安積原野の大

視原原の開墾計画を熱心に説き賛同された。その手助けをした立岩一郎、村上清通、小池友謙氏外 5名の官吏も大きく貢献した。[3] 安積疏水工事は政府から派遣されていた奈良原繁、南一郎平両氏の献身的奉職なくして完成出来なかった。特に南氏は大久保卿から東北開発可能地の調査命令を受けてからの関係でここの地理は詳しい、そして、安積疏水工事の初めから完成まで滞在し指導していた。

7．宮城・福島両県の住民と商人の捉え方

（1）宮城県の場合

野蒜築港の計画がされた頃の野蒜河口港は集荷のみで主流は松島湾の石浜港、寒風沢であった。一方、藩政時代から集散地の主流だった石巻港は河口港の宿命である砂の堆積により港は瀕死の状態にあった。しかし、松島湾内の石浜港、寒風沢は戊辰戦争後に活躍する仙台支藩が北海道移住の船出する所なので大いに賑い、これに便乗して東京の木村万平氏、埼玉県の白石広造氏が石浜にきた。白石氏は横浜で外国人に航海術を学び海上の輸送業を決心して明治 5年(1872)に桂島の石浜に「白石廻送店（白石商会）」の会社をつくり、北海道・関東・関西・方面との間に貨物の海上輸送を中心とする海運業を始めた。この頃に横浜、塩釜間の海運がはじめて開けて帆船から汽船と一大変革をむかえた。白石氏は野蒜築港の際には新街地に米商会設立の株主となり貢献し、又塩釜港の母体の「開港場」の埋め立ての功労者にもなっている。野蒜村では仙台藩士族の剣持伴秀氏が陸前野蒜米商会所創立に活躍、戸長・尾形喜三郎氏も米商会所創立の株主として塩釜の白石氏と共に署名運動している。[9]

戸塚貞輔も松平県令に協力した人である。同氏は石巻の豪商でいち早く野蒜村不老山一帯を所有、宮城共合会社荷捌所の設置、奥羽水陸運輸会社の設立や第七十七国立銀行（現・七十七銀行）の大株主になって活躍した人である。[10]

このように維新後の宮城県を希少な人達がなんとかしなければと活躍していることが分かる。

（2）郡山村の場合

戊辰戦争のあおりで郡山が戦いの場となり、江戸時代から宿場町として繁栄してきた、表通り両側、阿弥陀町、蔵場町、郷蔵、足軽宅、観音堂など町の大半が焼失した。その後、宿場町時代から町の名主として続いて来た、戸長・今泉久三郎、阿部茂兵衛、永戸直之介等が荒廃した郡山宿場町の復興と治安を急いだ。

明治2 年に新政府は産業を盛んにしょうと「生産方」を各地に設け、いち早く対応して阿部茂兵衛、永戸直之介、鴨原弥作等が役員に任命された。翌年には福島県でさらに生業を盛んにするため、資金を集めて生産会社をつくるように、白河・須賀川・郡山の生産方に呼びかけた。しかし、白河・須賀川の生産方は資金調達が出来なくこれを辞退した。郡山も「年凶にして、人心穏かならず、悪漢盗児、常に出没す」と世相もまだ正常でなかったが「郡山微弱なりといえども金を積むこといと易し。（中略）県庁、若し属官を派して、会社保護の責を尽さば一万金を積まん」と郡山の有志は安積郡内から1万1,700円を集め、県庁からの委託金2 万円と合わせて郡山生産会社を設立した。この様に積極的な姿勢が今後の町の発展の基礎となっている。この立ち上がりが先駆けで須賀川、白河に設置予定だった民政取締出張所（今の警察）や生産会社を郡山にもってきた。この発展には阿部茂兵衛、鴨原弥作、橋本清左衛門、安藤忠助外15名等は開成社員で貢献は大きい。[11]

8．野蒜築港と安積疏水の計画作成と実施

（1）野蒜築港の場合

明治9年9月に大久保卿は新港の適地を内務省土木局長石井省一郎、同六等属黒沢敬徳及びオランダ人技師ファン・ドールンをして実地調査させた。

新港の適地の報告が明治10年2月に6ケ月間の現地調査結果を同氏から報告された。それによると

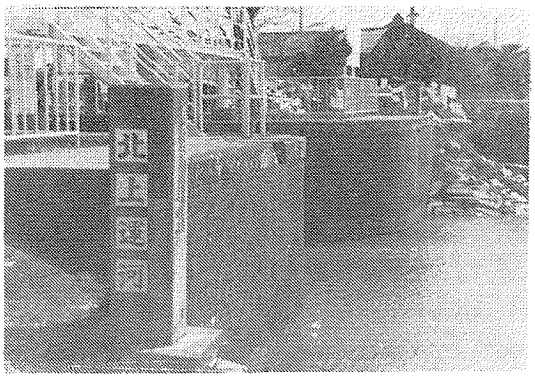
(1)北上河口（石巻）に深水港を築造することは、同川の吐き出す土砂多量のため不可。

(2)女川、萩の浜は良港であるが、前者は後背に山が迫り狭溢であり、後者は内陸との交通が不便である。

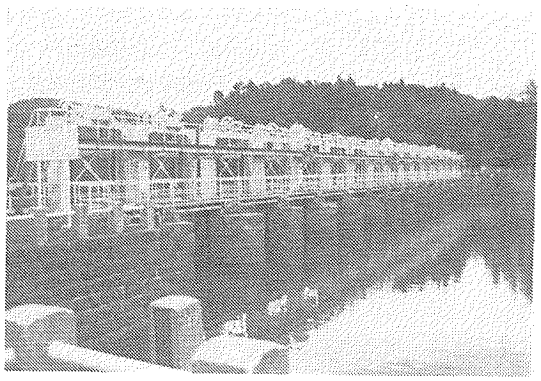
(3)その他石浜、寒風沢も候補に挙げたが、水深が不足し、かつ内陸との便も悪い。

以上の理由から野蒜を適地として決定する。

その計画は港を外港と内港とに分け、外港は外洋航路の大型船舶を碇泊させ、内港は和船及び、近海回航の小型船舶の繋留、北上川と松島湾とを運河で



写真－1　北上川閘門の現況
(S.61.10　撮影)



写真－2　十六門橋の現況
(S.61.10　撮影)

結ぶものである。工事の大略は次の様なことである。

・鳴瀬川河口内における碇泊地－内港の建設
・内港より外港に通ずる航路－港口及運河の築造
・鳴瀬川の切替及締切
・野蒜より北上川に通ずる運河－北上運河の開鑿
・松島湾に通ずる運河－東名運河の開鑿

当時は西南の役で内政に関して顧みる暇もなかったが、東北開発を重点計画であったので政府としては初めて内国債を発行して、当初予算67万8000円を計上し、土木局を野蒜に置き工事を進めることになった。

・明治11年7月に野蒜築港の着工式を実施.
・同年10月8日、北上運河の起工式、石井土木局長、ファン・ドールン、松平宮城県令列席
・同年12月、野蒜と蛇田高屋敷閘門を結ぶ北上運河が掘鑿され施行された。この運河は延長 6,500間、幅員84尺、水深は干潮面以下で5尺5寸とし、北上川に接する所に水門を設置し北上川との水位の差に備えた。[12]　(写真－1参照)

（2）安積疏水の場合

大規模開拓地候補地の調査報告が明治10年 4月17日、勧農局長松方正義あてに、次のような答申をした。

「開墾地ハ宮城、福島、栃木三県下ニ於テ、他県モ併テ検査仕処、青森三本木原、福島対面原外四原野ハ至極適当ノ場所ニコレアリ。此ノ際ハ先ズ対面原外諸原野ノ便否ヲ上聴仕候。」

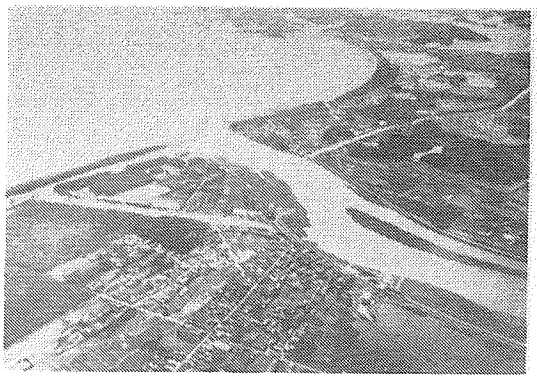
大久保卿は、猪苗代湖の水を東注するいわゆる安積疏水工事をも含む安積大開墾を、士族授産事業として取り上げる。延長52Km、分水路78Kmの安積疏水。およそ8,000町歩の水田に潅漑して、安積平野に一大産業地帯を開く決定決定的な水門を大久保卿は開く決意をしたのである。

大久保卿はその行動になかなか慎重で同年12月、もう一度、南一郎平を安積に派遣して猪苗代湖を調査させ中条政恒は南に湖畔の形勢、山河の地利を説明した。南は帰京して次のような復命をしている。

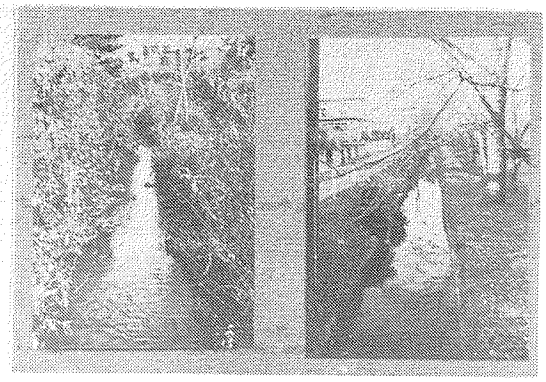
「猪苗代湖は対面原を西北に隔たるおよそ20km、湖面の海面を抜く512.7m、湖面の諸原野より高きこと約240mにして水を決するのは容易なるも、陸羽の山脈南北に連なり、今では隧道を開鑿する議ありしも、不二見嶺は4,691m、三森嶺は752mにして人力の及ぶところにあらず、しかるに耶麻郡山潟村田子沼の東嶺は開鑿容易なりと聞き、直ちに着手するに山脈東西より追り、うがつところの距離わずかに545mに過ぎず、隧道の下口は工事を要せずして川を下り、対面原附近の玉川堰に達す。それより熱海の南五百川、牛庭原まで水路の長さ29km、40kmの勾配あり、これ一大事業の起る所以なり。」と南はこの測量に一ケ年を要している。[13]（写真－2参照）

明治11年3月6日付で内務省は太政大臣三条実美あてに正式に稟議書を提出、同年4月6日に第1 回の地方官会議を開会しこの席上で安積疏水の案を提案して全国地方官の意見を聞いた。これまでにない民主的なもであったのだが甲論乙ばくして決定しなかった。

明治11年に千坂高雅少書記官を内務省の主任に定



写真－３　幻の港野蒜港の現況
（提供：河北新報社　S.58）



写真－４　安積疏水の現況
（S.63.10　第五分水系）

め奈良原繁を湖水開通の現地責任者とし、南一郎平と共に安積に常駐させ、県の中条政恒にもその業務を担当させた。同年11月には安積疏水の実施ありと早々にして九州久留米藩士族が「大地の侍」として安積地方に移住してきた。その総数は141戸、人口585人でその内訳は101戸は郡山町から北に10Kmの所の喜久田村の対面原開拓に従事し、残り40戸は郡山町から南西に 6Kmの所にある大蔵担原（桑野村の南）に落ち着いた。彼らは森尾茂助の主唱のもとに久留米開墾社をつくった。

明治11年11月1日から6 日までの4 日間、野蒜築港の現場から帰京の途次にファン・ドールンが立ち寄り開成山に一泊して、有志たちの作成してあった「従来調査セル所ノ図書」の図面で計画の大要を察知し、さらに数日間を費して現地を踏査した。同氏と安積疏水の関係はこれきりであった。

明治12年1月5日同氏は安積疏水工事の詳細な設計書を土木局長石井省一郎に提出た。しかし、政府は同年6 月にさらに勧農局の山田寅吉を安積郡に派遣して再検討をさせた。そこで伊藤博文内務卿はいよいよ疏水工事断行の決意をかため、同年9 月福島県に工事施工の諭達をし、奈良原繁（勧農局御用掛）を工事の管掌とし係員11名を任命した。野蒜築港開始から遅れること一年、同年１２月に着工された。

明治12月12月27日に開成山大神宮社前において起業式を行い。着工して僅か3年後の明治１５年で完成した。完成までの費用は約40万7,000円であった。当時は機械力がなく、人間の労働が頼りであった。この大事業の完成は工事に従事した人々の血と汗の結晶といえよう。完成を目前にして明治14年 8月、中条政恒、山吉盛典県令が更迭された。

９．ファン・ドールン帰国後の工事

（１）野蒜築港の場合

明治15年12月、この頃より野蒜港の港口や内港は漂砂により段々浅くなり始めた。又、ファン・ドールンが去ったあと内務四等属・黒沢敬徳（44歳）は現場責任者として奉職した人で、築港のあまりの激務のため体調崩し同年辞任した。翌年2月8日、病気回復せず逝去。

明治16年、野蒜築港の背後地（新街地）払い下げ始まるが、地元からは政府の試策を受けるだけの基盤がなかった。同年4 月に東名運河工事着手する。

明治17年 9月15～18日にかけて台風襲来、強風暴雨を伴い突堤の三分の一が根こそぎ決壊し没した。第二期工事前のことで堤防を保守出来なかった。

同年10月12日土方内務大輔、野蒜港を視察、同年11月9日、島土木局長、視察する。同２０日、山県内務卿、オランダ工師ムルデン、坪井海軍中佐も現地調査する。明治１８年、野蒜築港を正式に打ち切る

その後、１５年後の明治３３年に野蒜築港の請願書を国に提出したが衆議院を通過しただけで陽の目をみずに終った（写真－３参照）。

（２）安積疏水の場合

担当者は内務省権大書記疏水掛長・奈良原繁を主席にして南一郎平を専任とし、勧農局出張官として桑野村に常駐して進めていた。両氏とも安積疏水の

初めからの担当で完成まで奉職した。技術面は主に南氏が全面的に指導監督していた。明治13年11月第一期工事の戸の口の十六橋が完成、6万人の農民が参集して成工式を行う。明治14年7月25日に待望の沼上隧道が完成し五百川に貫流した。引続き吉田、対面原、広谷原に疏水を分派する。

安積疏水の成長と共に歩んで来た中条政恒氏が明治14年8月に太政官書記官に転任。天皇の二回目の東北巡幸があり、同年10月5日に桑野村に来られ発展途上の様子を見られ深く感銘された。

明治15年1月に三島通庸が県令として着任、同氏は大久保卿を支えた一人で安積疏水にも内部から参画して完成予定を二ケ月早く繰上げさせた。

同年10月1日安積疏水の通水式を開成山において挙行された。岩倉具視右大臣、徳大寺宮内卿、松方大蔵卿、西郷農商務等が参列した。関係郡民は喜んで是非通水祝賀会の経費を負担させ欲しいと願い出て金4,000円献上した。[14]

明治15～16年に安積開拓地への入植はほぼ終了した。その後、疏水利用の水力発電・工業用水等と工業郡山に大きく変貌していった（写真－4参照）。

１０．考察

野蒜築港は大藩・仙台の力を戊辰戦争で打ち消され精気の無い所への計画であったし、一番協力を必要とする県令との摩擦なども安積疏水工事と比較すると問題の一つであることが分かった。とりわけ野蒜築港が失敗に終わっただけに何故、あの時、あの人をと思う気持ちで一杯である。次の時代を背負う若い土木家がこのプロジェクト開発進行中に学びやを出ている。しかし、工事には携わっていないし、それに、外国から招聘した技師も協力体制の無いまま続行していたのは何故だろうかと日本の貴重な財産を水泡させてしまったのはただ技術力の不足と言い切れないのでないかと感じた。安積疏水の成功の影には郡山地方につちかわれてきた生活信念が絆を強くし、宿場町として位置ずけられていたため直接的には仙台藩の様に藩士が犠牲になることはなかったことも幸いしていなかったか。安積疏水の計画書も日本人の手で作りファン・ドールンが4日間の目通しと現地視察で監査したと言ってもいいのでないか。決して日本の技術の不足とは言い切れない証拠として充分と思う。

この安積疏水は琵琶湖疏水へと継承され日本人の日本土木技術の一ページとなった。

［本文注］

1)宮城県の歴史　高橋富雄著　p192-225
2)郡山の歴史　市教育委員会編　p-61-62
3)鳴瀬町誌全　鳴瀬町　p-743
4)鳴瀬町誌全　鳴瀬町　p-16
5)安積開拓史　高橋哲夫著　p-15
6)安積疏水100年史　百年史編纂委員会　p-42-44
7)仙台市史第 8巻　仙台人物誌
8)安積疏水100年史　百年史編纂委員会　p-112-125
9)鳴瀬町誌　鳴瀬町　p-516-522
10)陸前野蒜築港記　片平六左著　p-67-68
11)安積開拓史　高橋哲夫著　p-48-76
12)石巻市史第 2巻　市史編纂委員会　p-172-184
13)安積疏水100年史　百年史編纂委員会　p-12-13
14)安積疏水100年史　百年史編纂委員会　p-70-73

［参考文献］

岡田益吉(1977)　東北開発夜話　1,2
小林清治、山田舜(1983)　福島県の歴史 7
郡山市(1969)　郡山市史　4　近代（上下）
高橋富雄(1973)　東北の歴史と開発
佐藤昭典(1986)　もう一つの潮騒（前編）
田村勝正(1985)　開発の歴史地理
渡辺　文(1934)　安積疏水五十年史
宮城県(1960)　宮城県史　5
小川博三(1975)　日本土木史概説
長尾義三(1985)　物語日本の土木史
塩釜市(1985)　塩釜の歴史
三原良吉(1976)　宮城の郷土史話
菊池勝之助(1972)宮城県郷土史年表
河北新報新聞(1986)幻の野蒜港 1-15連載
宮城県(1977)県政だより連載　野蒜築港と仙台港
運輸省(1987)仙台湾沿岸域の歴史
太田隆・湯沢昭・小林眞勝(1988)貞山運河の歴史的背景とその利用可能性に関する研究（閑上－納屋）
伊藤卓・小林眞勝・須田熙(1989)安積疏水の歴史的評価（東北支部技術研究発表会）

付表　野蒜築港と安積疏水の比較年表　(参考文献より抜粋して著者製作)

年	国　　内	野　蒜　築　港	安　積　疏　水
1867	10/　大政奉還	(慶応4. 9. 15)仙台藩降伏、仙台役収	(慶応4)白河・棚倉・二本松各藩は諸藩に仮預けされた。
(慶応 3)	1/3　戊辰戦争の始まる	(慶応4. 12. 6)伊達家 62万石から28万石	すぐ廃止され政府直轄下
1868(〃4)	9/8　明治と改元一一世一元となる	(M2)仙台藩の志士・玉虫左太夫ほか切腹	
1869(M 2)	3/　東京都都	(M3)東京から木村万平くる。運漕店を開く	
	6/17　版(領土)籍(人民)奉還	(M3. 2. 27)亘理藩　伊達邦成、男女220名　移住の始まり	(M5. 6)安場保和が福島権令に任命され10/に県令となる。
1872(M 5)	・オランダ人技師ファン・ドールン来日	(M5)埼玉県人　白石広造　運漕業開店	(M5. 9)中条政恒が山形県より福島県典事に配属
1873(M 6)	・西郷隆盛の「征韓論」破れる	(M9. 6. 20)大久保卿　土木局長石井省一郎以下 数名で野蒜	(M6. 3. 5)中条政恒、部下職員と共に安積郡に赴任
	・大久保利通就任、首脳は薩長土肥	不老山から観望	(M6. 4)大槻原開拓着手
	・オランダ人技師デレーケ・エッセル来日	(M9. 4. 15)宮城博覧会を仙台の桜ケ岡公園にて開催	(M8)安積に新村設置の申請を内務省に提出、翌年 4月許可
1874(M 7)	・内務の属官　高島千畝・南一郎平　東北	(M9. 6. 22)天皇　宮城県に入る	(M9. 5. 31)大平村にて中条政恒と会う、大久保利通卿に安
	地方に調査命ぜられる	(M9. 9)仙台湾新港開設の調査にファンドールンと石井省一	積開拓と疏水を陳情する、大久保卿が関心を持つ
1875(M 8)	8/地方長官会議開く東北六県令の要望は交	郎等を派遣調査	(M9. 6. 16)天皇　開成館に臨幸される。
	通体系の整備であった。	(M10. 2)ファン・ドールンドールン　仙台湾新港調査復命	(M9)内務省勧農局　南一郎平　安積に常駐
1876(M 9)	5/23大久保利通卿は天皇巡幸前に先立ちし	(M11. 5)石井省一郎　黒沢敬悟ら野蒜築港現場に着任	(M11. 3)奈良原繁(主席)南一郎平(専任)経営監督
	て東北に旅立つ	(M11. 6)野蒜築港の北上運河・水門築造開始	(M11. 10)安積開拓地に第一陣として九州から旧久留米藩士
	6／2　明治天皇(25才)東北地方巡幸	石井外とファン・ドールンと数人のオランダ人技師	(M11. 11. 2-5)ファン・ドールン 猪苗代湖の疏水視察
1877(M10)	3/野蒜築港が正式決定。	(M11. 7)野蒜築港第一期工事着工	(M11. 11. 11)久留米藩で先発隊到着
1878(M11)	3/大久保利通卿が三条に建議書	(M11. 8. 25)松平正直　県令着任	M12~14年にかけて続々移住者入植
	5/14大久保利通卿(49才)凶漢に暗殺	・早川智寛を三重県より土木課長とし迎える。	(M12. 10)安積疏水工事着工　政府直轄工事として
	ー疏水計画書「済生遺言」残る	(M12)松平県令は野蒜築港に関連開発の計画案を提出	(M12. 10. 27)開成山大神宮にて起工式を行う
1879(M12)	1/安積疏水の計画書を提出	(M13)現場監督は黒沢敬悟(内務四属)野蒜築港の責任者	翌日から工事開始、水門工事から
	3/29蘭人ムルデン 来日	(M13. 7)石井閘門完成　記功文の銅板を埋め込む。	(M14. 7. 25)沼上隧道貫流して五百川に流れる。
	6/安積に勧農局の山田寅吉を派遣して再検	(M13. 12. 14)野蒜築港の北突堤落成	(M14. 8. 1)吉田、対面原、広谷原に分派して流水 也
	討する　伊藤内務卿　疏水工事断行の決意	・県会議長・増田繁幸が県債募集で六大工事提案	(M14. 8)中条政恒　太政官として転出
1880(M13)	2/ファン・ドールン帰国	(M14. 9. 15)仙台で野蒜築港第一期工事落成式典を行う。	(M14. 10. 5)明治天皇　2回目の東北御巡幸、開成山に来る
1881(M14)	7/29明治天皇　第二回目の東北巡幸	(M14)野蒜新市街地建設ほぼ完成　国から宮城県に移管	(M15. 1)三島通庸が山形県より福島県令に着任。
1882(M15)	・伊藤博文　憲法調査の為渡欧	(M14. 8. 12)天皇　仙台御着	・安積開拓地への入植は明治15～16年にほぼ終了した。
1883(M16)	・鹿鳴館を東京の日比谷に建てる	(M14. 8. 13)御代巡、有栖川宮熾仁殿下　野蒜に行幸	(M15. 8. 10)安積疏水通水開始
		(M15. 9)野蒜築港竣工　総工費　68万3000円	(M15. 10. 1)安積疏水の通水式を挙行し完成を祝う。
		(M15. 10. 30)野蒜築港の突堤落成式	総工費　40万7000円　人夫延べ　85万
1884(M17)	・加波山・群馬・秩父事件おきた。	(M16)野蒜築港の新街地の払い下げ始まる。	(M16. 6)/安積疏水計画全工程を完了。
	・鹿鳴館で舞踏会盛会。	(M16. 4)野蒜築港関連工事の東名運河工事着手　～M 17完成	(M16. 7)安積36村が連合会規則を制定。
		(M17. 9. 15～18)大型の台風が強風暴雨を伴い襲来し突堤の	(M16. 10)水利取締規則制定。
		1/3が根こそぎ決壊没した。	(M16. 12)安積蓮の種穂を宮内省に献上。
		(M17. 10. 12)　土方内務大輔が野蒜港を視察	(M19. 5)国営施工の安積疏水事業の管理権を福島県に移管
		(M17. 11. 9)　島士木局長が野蒜港を視察。	(M21. 7. 15)AM 7. 45　会津磐梯山大噴火。
		(M17. 11. 20)　山県内務卿・オランダ工師ムルデル・坪井	(M22. 3)安積疏水を福島県から関係民に引き継がれる。
1885(M18)	6/2琵琶湖疏水工事、両基点から開始	海軍中佐等も野蒜港現地調査。	(M22. 4)郡山に町政施行(人口8,031人)
1886(M19)	・伊藤博文・第一次内閣総理大臣	(M18)野蒜築港を正式に工事打ち切り決定	(M29. 2)安積疏水から郡山絹糸紡績会社へ工業用水
1887(M20)	・東北本線ー上野ー仙台ー塩釜間開	(M18. 6)内務省土木局出張所岩手県一ノ関に移転。	(M31)沼上発電所ー郡山まで24kmの日本最大の長距離送電
1888(M21)	・枢密院が出来る	(M21. 7. 1)三居沢で発電	
1889(M22)	2/11大日本帝国憲法発布	(M22. 4)　仙台に市政施行(人口 86,352人)	
1890(M23)	・琵琶湖発電成功		(M33. 4. 14)中条政恒歿(1841~1900)
1900(M33)			
1906(M39)	2/ファン・ドールン歿(1837-1906)		